

# ESSAY

## びっくり仰天旅行パンタナール

中村 恭一

東京医科歯科大学医学部病理学講座

今から約30年前、癌研病理に在職していたときに、ブラジルのマリリア大学医学部病理の若い教授 Antonio Placido Pereira が胃癌の研修にきていて、約6カ月間一緒に勉強した。その1年後、ブラジル病理学会に招待されたときには今でこそ一般的な観光地となっているが、当時は知る人ぞ知るという程度であったイグアスの滝へ連れて行ってくれた。

彼は突然に珍しい企画を実行して相手を驚かせる癖のある男である。現在、彼はプレジデnte・プルデnte市 Presidente Prudente で病理診断を開業し、現在ではその市の90%の病理検査を一手に引き受けている。1997年8月中旬、プレジデnte・プルデnte医学会の創立50周年記念講演会があり、彼は前・医学会会長であったこともあって、彼の肝いりでその会に一内視鏡・X線医つきで招待され、九州国立がんセンターの清成秀康先生をお願いしてプレジデnte・プルデnte市へ同行していただいた。

成田を出発して約35時間後に疲れ果てて当市に到着し、多くの関係者の出迎えを受けやれやれと安堵し、今晚はゆっくりと休むことができると思いきや、『明日朝7時にパンタナール Pantanal へ3泊4日の予定で出発する』と空港でスケジュールを知らされた。これが、自分にとってびっくり体験のはじまり

である。パンタナールとはどのようなところであるかをその夜の会食で聞いたところ、『地球上の最後に残された秘境で、そこは広大な湿原でワニなどいろいろな野生の動物が生息している。そこで魚釣りをする』という。パンタナールへは4人乗りの小さな飛行機で行くから荷物は小さいの1個ということで、別れ際に小さなバッグを渡された。

翌朝6時に時差ボケのままに飛行場へ行き、ブラジル製の小さな飛行機に乗り込み、一路西南に進路をとりパンタナールをめざして飛び立った。パンタナールまでの飛行時間は約4時間、途中カンボ・グランデ Campo grande で給油と小休止するという。幸い好天に恵まれ、飛行機の多少の揺れと寒さもあまり気にならず、高度600mからの下界の景色を満喫する。どこまでもつづく平原の風景にも飽き、前のパイロットをみると手放し運転である。この飛行機は方向はもちろん、姿勢の維持も自動制御である。

カンボ・グランデを飛び立って30分くらいしてからであろうか、突然地面が陥没していて、その縁があたかも小高い山脈のようになっていてそれが地平線に消えている光景が目に見え込んできた。地面の陥没面はきらきらと輝く、果てしなく広がる水面で、そのなかに大小さまざまな形をした島があるといった光景である。ちょうど、南米大陸にできた

拡大型 IIc で、へりの部分をみれば IIc + IIa。陥凹面には島々一再生粘膜島がたくさんあるから、さしずめ南米大陸にできた IIc 型未分化型癌といったところである。行けども行けども同じ景色の連続、湿原というから釧路の湿原を想起していたが、それは完全に打ち砕かれその広さにただ驚くばかり……。何と形容したらよいのやら言語中枢のなかに言葉は登録されていない。この湿原の広さは日本国土と同じであるという。8月は冬の乾季で水量が少ないのでこのような景色となって魚釣りができるが、夏は雨季で水が増量して小さな島の多くは水没し、この地域に入ることができないという。飛行機の高度を下げてくれたので島々の密林と草原がよく見えた。草原のある島をよく見ると、何と牛がたくさんいるではないか！ 野生の牛がいるのかと前の席に座っている Dr. Luis Augusto に聞くと、乾季に船で牛を運んで放牧し、雨季になる前に再び船で回収するが、回収は完全ではなく回収できなかった牛は雨季に溺れてピラニアの餌となるという。この淡水海で魚釣りをしてわかったことであるが、水面下にはピラニアがうようよしている。約4時間の飛行のち、高度を下げて着陸態勢に入ったが、下には水と密林しか見えずどこに降りるのか見当もつかないままにどんどん降下し、下は水、目の前は木々に覆われた島のへりしか見えない。とすると、目の前に狭い草原と小さな建物が見えてきたが、まさかそこに着陸はしないであろうと思うのもつかの間、とんとんと飛び跳ねながら着陸した。

12時ごろやっと目的地に到着し休めるなと思って周りを見回したが、周囲は飛行機の進入空間の水辺を残して密林のみ、貴方任せの旅とはいうものの泊まるホテルもみあた

ずいったいどうなっているのであろうかと心細くなる。飛行機の整備をしている間、草原の水辺をみると小さな長い4人乗りくらいの船が2隻横づけになっていた。それに乗って大小の島の間の迷路のような水面を時速30kmくらいでひた走る。風を切るので寒い。島のへり近くを走っているときは舟の上下動も少なく周囲の景色を見ながらの快適な走行ではある。人の住んでいるかけらもなく、舟に取りつけてあるエンジンの騒音を除いては自然そのものである。それもつかの間、島のへりから離れたところを舟が走るときには水面が波立っているので、舟はドシーン、ドンドン、ドンと不規則な上下の激震、船頭さんは速度を落とすのであるがそれでも座骨の衝撃は頭蓋骨にじかに伝わり胃の腑は踊る。船底に置いておいたバカチョンカメラは跳びはねの連続でこわれてしまった。約30分の後にやっと目的の島に到着した。

島の緩やかな斜面の一部が水辺から切り開かれていて、小高くなっている処にむき出しのレンガ造りの平屋が大小とりまぜて四つある。その一番大きい家に泊まることになる。この家は十畳ばかりの部屋が五つ直列に並んでいて、各部屋にはシャワーつきの洗面所と二段ベッドが二つ、4人泊まれる。部屋の前は広い廊下となっている。この廊下につづいた別棟に食道と調理場がある。この建物から離れたところに雑な建物があり、ここはわれわれの滞在中の面倒をみってくれる船頭とか調理人の家族が泊まっている。さらに離れたところには発電機小屋があり、ディーゼルエンジンが鳴り響いている。家があるところは雨季になっても水漬けにならない場所である。水辺から坂を登って行く途中に転がっている大きな石に雨季の水位の跡をみることができ

る。パンタナールは世界の自然保護区に指定されていて、家を建てる場合はブラジル政府に許可を得てお金を払って土地を借りるのだという。ここで魚釣りをするときには、政府の許可証が必要であり、その許可証は約10ドルである。出漁には必ず許可証をもって行くようにいわれていたが、こんなにも広大なところで検査には来ないであろうし、探してもいないであろうとは思っていたが一応携帯することにした。2日目の午前にエンジンの音もけたたましく一隻のモーターボートが近づいて来た。検査官である。許可証の呈示を求められ、また漁獲の検査を受ける。ここは自然保護区であるため、魚釣りには疑似餌の使用は禁止され、小さな魚は水に返さなければならない。小さい魚といってもその大きさは30cmもある。この施設はプレジデンテ・プルデンテ市の医師とその他の10人が共同出資して魚釣り用に建てた。そのうちの一人はDr. Antonio Placidoに紹介されて癌研で3カ月ばかり内視鏡を勉強したDr. Luis Augustoで、東京では時に彼と赤提灯と一緒に酒を飲みながら片言のポルトガル語会話の実習をしたものである。この医師が釣り狂がいで、一部始終面倒をみてくれた。この家に宿泊するために、1カ月以上も前から船頭さんや調理人を雇い、食料品、ビールなどを大量に輸送して準備したということである。

われわれ一行4人が到着した時には、別の便で4人が到着していた。部屋割りもすみ荷物をベッドの上に置いて部屋を出ると、もう外で2、3人がビールを飲みながら歓談している。今日は魚釣りをしないでゆっくりと休養するのかなと思っていたところ、3時ごろになって病理医Dr. Arberto IbrahimとDr. Philadelphio Vencoがサン・パウロからやっ

てきたのには驚いた。日本で毎年9月から約3カ月間の期間をもって外国病理医のための消化管病理学研修会（JICAと筑波大学そして東京医科歯科大学との共催で、1997年には15回目が開催された）を開催しているが、彼らはそれに参加した病理医で、その後も何回も南米で会っている友人である。三機の飛行機でプレジデンテ・プルデンテから、サン・パウロからとパイロットを入れて合計12人が集合した。

サン・パウロ組と話し込んでいると、近くでは魚釣りの用意をはじめている。これも明日のための用意かと思いきや、これから出陣する、夜は冷えるから防寒の用意をするようにという。まさか夜暗くなるまで魚釣りではないであろうとたかをくくって、防寒の衣服の用意もないことであるしそのままに出かけることにする。一隻の舟に後ろから船頭、Dr. Luis Augusto、清成先生と私の順で乗る。舟の先頭に座り一番よい席に座ったなと思ってるうちに舟は速度を高め、風切りの役目をするようになりとても寒い。素人目には島の周りは漁場そのものであるからそう遠くへは行かないであろうと我慢していたが、ボートは大きく右に左にと曲がりながらいくつかの島を通り過ぎ、30分も走ったであろうか、やっと島の水辺に水面から1メートルもある大きなキンギョソウが密生しているところに舟を突っ込んで停止させる。その瞬間、蚊を含む小さな虫の大群がウーンと沸き上がる。なんでこんなところに舟を止めるのかと思って水面をみると、水が流れているではないか！ここパンタナールは湖と島の集まりあるいは海の中の島々であろうと思っていたのは誤りで、島々とその間を錯走するように流れている太い川なのである。川の流れの方向は場所によって違って、川の上流がどの方向な

のかは皆目見当がつかない。この流れはまさかコリオリの力によるものではないであろう、流れがあるからには水は海に注いでいるのであろうと思い Dr. Luis に聞くと、パラナ川から大西洋に流れでているという。

リールつきの釣り竿に、船頭さんに餌をつけてもらって、座ったままで糸の先を遠くに投げるのであるが、はじめは舟の近くにボトンと落ちてうまくいかない。立って投げたいのであるが、舟が小さいのでグラリときてピラニアが待っている川に落ちかねないので危険である。何回か試みているうちにやっと遠くへ飛んだ。餌は拇指頭大の足をもぎ取ったカニの胴体である。これでどんな魚が釣れるのかと問うと、パクーであるという。どんな形の魚かわからぬままに釣り糸をたれて周りの景色をぼんやりと眺めているうちに、手元にコツン・コツン、ガッーンと手応えがあった。あわてて竿をグイとあげ、竿はしなる。糸をたるませないように竿先を水面に近く下ろしてリールで糸を巻き、その繰返しを2、3回すると魚が水面近くにまで姿をあらわし、魚は右往左往する。船頭さんが糸をつかんで魚を舟にあげてくれる。大きき 40 cm くらいのパクーである。パクーは鯛のような形をした薄ずみの色をした魚である。3人がはじめて糸を垂れた場所で2匹くらい釣ったであろうか、その後さっぱり当たらないので場所を移動する。

30分くらい走って同じようにして舟を止める。虫のシャワーが水面から吹き出してきた。虫が顔といわず靴下を通して襲ってくる。こんどは夕暮れ時の蚊の大群である。竿を舟に固定して竿先を見ながら蚊と戦う。薄暮から夜の暗闇になると蚊はいっせいに姿を消し

物音一つしない静寂そのものである。静寂を破って仲間の舟の移動するエンジンの音が遠くにしばし聞こえてはやむ。都会の騒音と社会の歯車に回されている毎日から離脱して、月の明かりがきらきらと水面の流れを照らしている静けさのなかに身を沈めている自分が別人のように思えてならない。今度は長さ 15 cm くらいのゴンズイのような生きた魚を餌として、別の魚を釣るという。糸を投げ入れるとすぐに当たりがあり、リールを巻く。餌は半分には食いちぎられている。ピラニアの仕業であるという。2、3匹のピラニアを釣り上げるも体長 30 cm 以下で船頭さんが水に返す。やっと 40 cm くらいのピラニアを舟端に引き寄せ、船頭さんに釣り針からはずしてもらおう。ピラニアの歯は鋭く、これに噛みつかれたらひとたまりもない。細い針金をも食いちぎるという。そのためか釣り針は太くて大きい。ゴンズイもどきの餌では、大きなナマズのような魚、スルピンが釣れる。スルピンの体の色はさまざまであり、その仲間のなかにはピントード（絵を書いた）という呼ばれている黄色、青色、灰色の三色アブストラクト絵画の模様の肌の奴もいる。清成先生はピントードを釣り上げた。

ここは日本と時差が12時間で昼夜が完全に逆である。腕時計をみると9時である。釣り糸をあげ帰途につく。島々はどれをとっても水平線の上に黒く塗られた短いあるいは長い帯のように見え、何を目標として舟を走らしているのかわからない。舟をおりてから、船頭さんにスペイン語とポルトガルの混じりのポルトニョール語で帰り方を質問してみたが、感であるというようなことをいっていた。船頭さんは舳先を地面にあげて舟を固定すると、その水辺のそばで釣ってきた魚を蛮刀の

ような刃物で魚をさばきはじめた。鱗がないので、はらわたを一塊にして取り出して水に投げ捨てる。浮き袋がついているのではらわたは浮いていて、ゆらゆらと回るともなく不規則運動をしながらだんだんと小さくなっていく。小さな魚がたくさんよってきて食べている。肉食の小魚であろうか、当然ピラニアの稚魚もいるのであろう。

出漁していた4艘の舟が三々五々と帰還する。ビール、パチーダ、ウイスキーを飲みながら釣りの成果に話を咲かせているグループ、シャワーを浴びる者、休息している者と勝手気ままに一時を過ごす。ビールのつまみはパクーの唐揚げである。この魚は骨が頑丈にできていて、あばら骨は爪楊枝ほどの太さがあり、その周りについている身をしゃぶって食べる。11時ごろに夕食である。釣ってきた魚の一匹まるごとのフライ、バター焼きがでる。ピラニアは骨ばかりでスープにする。

翌朝、7時頃に釣り狂がいのDr. Luis Augustoがみんなを起こしに部屋をまわる。ここパンタナールでは何もすることがない。ただひたすらに10時に出漁して13時頃に帰還、再び15時から21時頃まで出漁、その後はアルコール飲料を飲みながら釣りの成果など、ひととき話を花を咲かせて就寝の繰り返しである。釣り場に行く途中、島のへりを走っているとワニが日なたぼっこをしていたり、

一般には知られていないカピバラという動物、色は違うがフラミンゴのような足長の鳥が散歩している。今日は黄金の魚エル・ドラド el dorado を釣るという。この魚は肌が金色をしていて水面近くを遊泳しているので錘のないただゴンズイもどきの餌を川の流りにまかせて糸を出す。この場所は色の違う水の流れが接していて、小さな渦があちこちにみられる。エル・ドラドはなかなか釣れない。諦めて、パクー、ピラニア釣りに場所を移動する。今日は2匹のパクーを釣り上げたが、一匹は針が眼に、もう一匹は腹にひっかかっていた。船頭さんはおもしろい釣り方をすると行って喜ぶ。餌を食べた魚はそのまま食い逃げ、そばにいた別の魚がひっかかってきたのである。まさに、そばづえを喰らったわけである。

サン・パウロからの帰りの飛行機の中でイカロというバリグ航空の雑誌をみていたら、パンタナールのへりに観光のためにホテルの宣伝があった。これから南の密林パンタナールも北のアマゾンの密林のように開発が進んで旅行しやすくなるのであろうが、一方では自然保護が叫ばれている現在、観光化はあまり進まないのかもしれない。パンタナールからプレジデnte・ブルデnteに戻った後には3日間の講演と夜のパーティ、東京に帰還する。